

NEW



ホルベイン工業株式会社
東京都葛飾区東池袋 2-18-4
TEL. 03(3983)9251
大阪府東大阪市上小阪 1-3-20
TEL. 06(6723)1554
www.holbein-works.co.jp

油絵具の上に水性の絵具を持ち込むと、必ずひび割れを起こす。このジレンマまで解決してしまったのがホルベイン「デュオ」。水に溶ける油絵具としてだけではなく、混合技法の可能性をより広げた新しい絵具としても注目されているのだ。仕上げの段階で細部を詰めるときなど、水性なので筆の切れが良く、繊細なマチエールを油絵の上に乗せられ、乾燥の後は本来の油絵具で描いたような画肌に仕上がる。もちろん、溶剤に対するアレルギー問題も一掃した。換気に気を使わずに創作に打ち込める。また新たに顔料から見直した全100色のラインアップも大きな魅力。プロユースという声へ、大胆かつ繊細な解答である。

水で描ける——次世代油絵具

アクアオイルカラー「デュオ」

私は、生まれながらに繊細である。



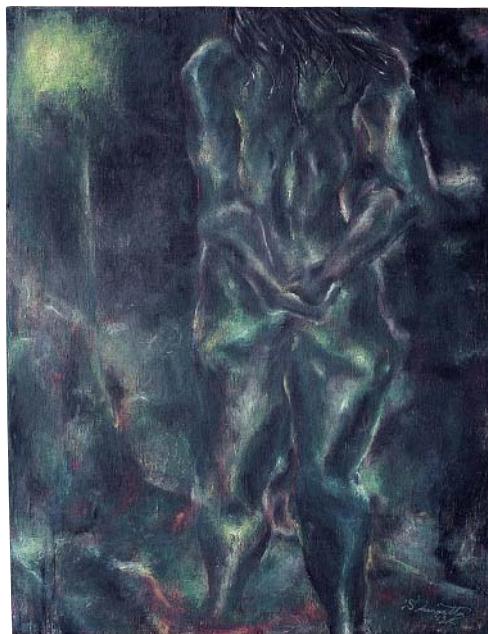


木下晋

鉛筆で描きだすいのちの光闇

林 洋子=文

Text by Yoko Hayashi



起つ 1963 ベニヤ板にクレヨン 114×88 cm 作者蔵



第27回自由美術協会(1963年)に《起つ》が入選、上京した。国立西洋美術館にあるロダンの《カレーの市民》の前で、協会の同人たちと並ぶ学生服の木下(右)は16歳の高校生。もちろん最年少での入選だった

1963

「中学時代から彫刻をつくっていましたが、初めての絵画は板にクレヨンで描きました。《起つ》は、マイヨールの後ろ手に繋がれた裸婦像《とらわれのアクション》に着想したものです」

木下晋と話していると、つい時代」を錯認してしまう。不思議な作家である。

2001年に直島で行われた「スタンダード展」をはじめ、特に近年ようやく、現代美術の展覧会での起用が目立つ。それでいて、既に60、70年代に美術界の大物たちと交流を持っているのである。経験を見直すと彼はまさしく団塊世代なのだが、活動は60年代前半、つまり10代後半から始まっている。彼は美大を経ていない、独学の人である。60年代後半、同世代が学園紛争に熱中するのを「学生にしか発言できないわけがない」と傍目に、木下はもう生活と制作に突入していた。そうした年齢と世の動きとのギャップに混乱させられるのである。

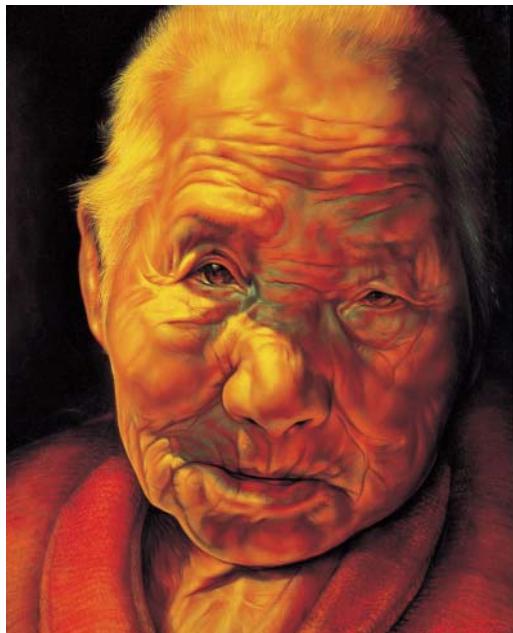
北陸・富山での幼少時、木下は貧困の中に育った。失業した父、弟の餓死。愛情の対象であるはずの実母には、家出癖があった。彫刻家の大滝直平(当時、富山大学

I982

「74年に旅した欧洲で
レンブラントの最晩年の自画像や
『モナリザ』に魅せられました。

帰国後、家族の顔を描き、
81年前後にニューヨークの
画廊に持ち込んだけれど、
売れませんでした。

その直後です。小林ハルさんに
出会ったのは」



祖母ソノ像 1979 キャンバスに油彩 90.9×72.7cm 個人蔵

教育学部助教授)による研究室の
市民開放に参加したことが、中学
2年生だった木下を美術へのめ
り込ませた。ロダン風の頭像など
を習作したが、しかし自宅は彫刻
をやれる環境ではない。絵ならと
思ったが、油絵具を買う余裕もな
い。板にクレヨンで描いた第一作
が、大滝研究室で知り合った彫刻
家の木内克を通じて画家の麻生三
郎の目に留まり、勧めら
れて自由美術協会展に出
品したところ、入選する。
最年少での入選は、あつ
という間に全国に木下の
名を知らしめた。

1970年に恋人と
駆け落ちし、住み着いた

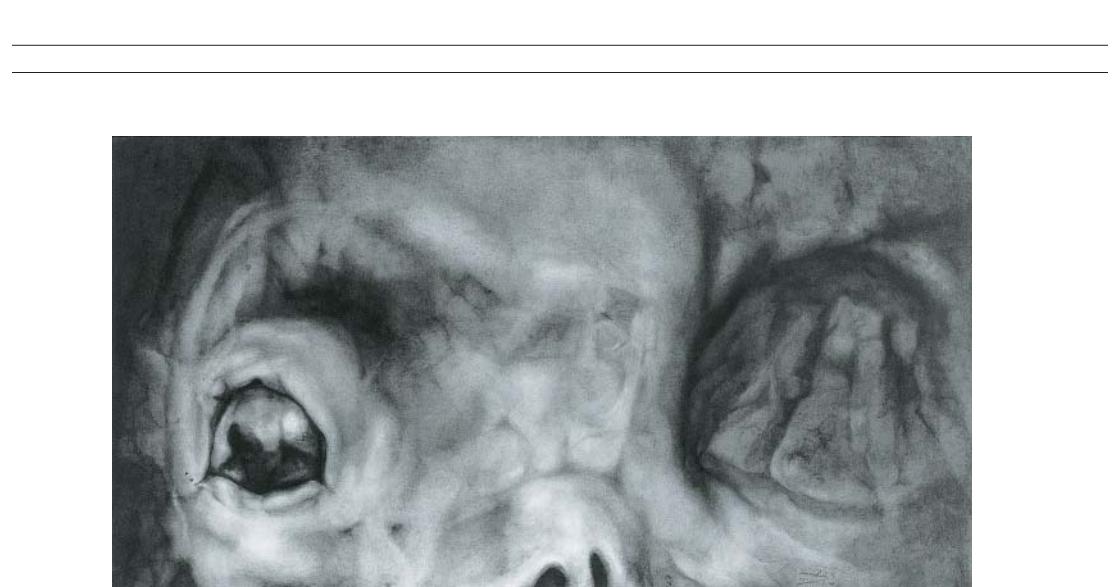
新潟では職業を転々とし
ながら人体や静物を油彩
で描き、東京の画廊で個
展を続けた。この新潟時
代の前後、20代で木下は
対照的な二人と出会う。
富山出身の瀧口修造と、



ゴゼ 小林ハル像 1983 ケント紙に鉛筆 73×103cm 個人蔵

新潟に縁をもつ洲之内徹である。
同郷の美術評論家は69年に木下の
初個展(銀座の村松画廊)に来場
し、彼が他界するまでの10年間、
木下はその落合(新宿区)の自宅
を毎年訪れた。そこでピカソやミ
ロの作品や訪ねくる芸術家たちに
接し、「日常にありえない世界」
を垣間見た。エッセイ「気まぐれ
美術館」で知られる洲之内は、72

新潟に縁をもつ洲之内徹である。
同郷の美術評論家は69年に木下の
初個展(銀座の村松画廊)に来場
し、彼が他界するまでの10年間、
木下はその落合(新宿区)の自宅
を毎年訪れた。そこでピカソやミ
ロの作品や訪ねくる芸術家たちに
接し、「日常にありえない世界」
を垣間見た。エッセイ「気まぐれ
美術館」で知られる洲之内は、72



帰趣 2007 ケント紙に鉛筆 100×190cm ハンセン病元患者の詩人、桜井哲夫氏を描いた。

国立国際美術館(大阪)で9月30日～11月24日に開催される「アジアとヨーロッパの肖像 SELF and OTHER」展に出品される

2008 「皺に、人生の軌跡とメッセージを見てきた。

しかしハンセン病元患者の84歳の皺は
溶けて、胎児のごとくなかったのです」

年の櫻画廊での個展に、麻生に連れられて現れたのが最初だった。新潟の地縁から彼と木下は意気投合し、洲之内の営む銀座の現代画廊で木下の個展が重ねられた。1974年、約1か月をかけた「ヨーロッパ遊学」を果たしたことで、木下は「顔」をモティーフとする。77年に30歳で東京に出て以後、妻が生活を支え、彼は制作に専念した。そうした油彩画は、しかし81年頃に持ち込んだ二ユーヨークの画廊では反応が薄く、落胆した。オリジナリティを模索し、苦悩していた時期、洲之内に誘われた新潟の温泉地で、木下は「最後の長岡瞽女」の芸に遭遇する。三味線の弾き語りをしながら



天空之扉 1989 杉板に墨
400×200cm 湯殿山注連寺
(山形県鶴岡)に描いた天井画
撮影=山本克美

各地を回ってきた盲目の旅芸人、小林ハルの圧倒的な存在感に取り憑かれた木下は、モデルになつてほしいと申し出る。83年に許されるが、1900年生まれの高齢のハルとは、面会時間は二日に一度、3時間ずつ。のべ5日間かけて鉛筆画『ゴゼ 小林ハル像』を完成させた。生後間もなく失明した全盲のハルだが、彼女が語る過酷な人生に、木下はまず「闇」——社会の闇と彼女自身の心の闇を、そして言葉に「色」を感じたという。徹底した凝視、長い対話、そして記憶が重ねられた成果。「モノトーンのデッサンでもよければ色を感じさせる」。すでに70年代末の木下は、油彩画の色彩に違和感を持つようになっていた。もともと同系色を何色も使う傾向にあったが、モノクロームへ移行するステップで彼が選んだのが、鉛筆だった。「下書き」の意味合いが強い鉛筆を、ひとつ独立した画材として見出



きのした・すすむ

1947年富山生まれ。中学時代に木内克彦に彫刻を学び、独学で油彩を身につける。63、64年と続けて「自由美術協会美展」に入選(東京都美術館)し、66年には「主体美術協会美展」に入選(東京都美術館)。69年村松画廊(東京)で初個展以後、現代画廊(75、77、79、81、83、85年、東京)、ストライフ美術館(87、90、93年、東京)のほかパリ、NYなど国内外画廊で個展。97年池田20世紀美術館(静岡)、98年久万町立美術館(愛媛)、02年信濃デッサン館(長野)、などの美術館で個展。グループ展では83年「現代のアーリズム」(埼玉県立近代美術館)、95年「戦後文化の跡跡 1945-1995」(兵庫県立美術館ほか)、04年「六本木クロッシング」(森美術館、東京)、05年「老い—老いをめぐる美とカタチ」(福島県立博物館)、07年「線の迷宮II—鉛筆と黒鉛の旋律」(目黒区美術館、東京)などに出品。著書「ペンシルワーク 生の深い淵から」(リ文出版、2002)ほか。01年より東京大学工学部建築学科などで講師を務める。

昭和40年代築の団地の一室、その8畳ほどの居間が木下のアトリエである。画材や出版物やファイルなどの資料、亡き母の仏壇、愛猫のトラ吉……、彼と家族の生活が充満した空間では、最大で100×190cmのケント紙を、ベニヤ板にピンで留めて描く。彼の描く人物は等身大よりもずっと大きく、圧倒的な存在感で躍一本でもが饒舌だ

Photo Kenji Morita

したのである。1種類の鉛筆で筆圧をえて濃淡を付けるデッサンではなく、ひとつのメーカーの鉛筆を9B(ブラック、最も濃い)から9H(ハード、最も硬い)まで20段階使い分ける。漆黒から限りなく白に近いグレーまで鉛筆のグラデーション表を自分でつくり、それを参考に重ね塗りする。例えば9Bで下塗りした後、H Bで透明感を加える。生え際の白髪などは、カッターで切つた消しゴムのエッジで描き(消し)、後から9Hくらいで薄く線を加える。ケント紙の変色を避けるために、ハイライトの部分でさえ最低限の黒鉛を載せているのだ。試行錯誤の末に到達した「無限の線の集合体」。それは驚くほどしくくりと彼の体质に馴染み、20年以上続いている。写真表現をはるかに超越した階調と細密さで、妖気に漂わせる。

1990年前後に母セキ、洲之内ら、木下の身边に死が重なつ

H Bで透明感を加える。生え際の白髪などは、カッターで切つた消しゴムのエッジで描き(消し)、後から9Hくらいで薄く線を加える。ケント紙の変色を避けるために、ハイライトの部分でさえ最低限の黒鉛を載せているのだ。試行錯誤の末に到達した「無限の線の集合体」。それは驚くほどしく

くりと彼の体质に馴染み、20年以上続いている。写真表現をはるかに超越した階調と細密さで、妖気に漂わせる。

的な存在感」なのである。

まれなる「詫ない人」——木

下は高齢や病で外出が難しい人物を訪ね、ゆかりの土地を歩く。モダニズム写真のパイオニア中山岩太夫人の正子、谷崎潤一郎『痴人の愛』の主人公のモデル和嶋せい……。話を聞き出しながら、鉛筆を操る。飘々とした笑顔から垣間見える俗っぽさと、そして冷徹な観察眼。モティーフを取り聞む「闇」、もしくは「淵」からは、無限の語りがあふれ出ている。

●はやし・ようこ「美術研究」
8月9日、東京・町田の作家宅にて取材

た。最大の喪失は05年に105歳で逝った小林ハルだ。でも「死はひとつ区切りであって、終わりではない。ハルさんも母も描き続ける」。近年の重要なモデルは、ハンセン病元患者で詩人の桜井哲夫であり、今後、新たに加わるとすれば「やまいをもつ娘」だといふ。彼が追い求めるのは老いや病ではなく、自らにとつての「圧倒的